

あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

No.33

ニセコ町の事例

— 地域資源循環型クリーン農業を實踐し

地域共生を目指す —

◇ニセコ町の沿革と概況

地勢は北海道の西部、後志支庁のほぼ中央部にあり総面積約一九七km²を擁するが、北海道の市町村の平均三九四km²の半分の面積である。主な山岳であるニセコアンヌプリ、昆布岳そして「蝦夷富士」の愛称で親しまれている国立公園羊蹄山（標高一、八九八m）

に三方を囲まれ、この中央を全国の一級河川清流ランキング四年連続一位となった尻別川が東西に流れている。内陸的な気候を呈し、平均気温は六・三℃、冬の最深積雪は二〇〇cmに達することもある。人口は四、五八九人（平成十五年四月末現在）で、六五歳以上の高齢者比率は、平成九年二一%から十四年の二四・三%（北海道の比率は前回

政調査によると一八・二%）で少子高齢化が進行してきている。

産業別人口比率の推移を見ると、第一次産業の農業は、昭和三十五年の六五%、昭和五十五年四二%、平成十二年二四%と減少してきている。これに対し観光を中心としたサービシ業である第三次産業は、昭和三十五年の二六%、昭和五十五年四〇%、平成十二年六四%と増

加を示している。

農業の主要作物は、馬鈴薯・水稲・大豆・小麦ほかてん菜・スイートコーン・メロン・アスパラガス、かぼちゃ等で総営耕地面積は二、一六一ha（平成十一年産）となっている。観光について、観光客の入り込み数の特徴は、一月と八月にピークがある二峰型となっているが、年間約一四五

万人で横ばいの実状にあり、道内外の客の割合は、道内五五%、道外四五%である。

◇環境の保全

町は、地域の自然環境や生活が河川や地下水などの水循環（水環境）の保全を中心に、自然生態系や地域生活文化を守り育てることを目的として、「二セコ町環境基本計画」を平成十四年三月に策定し、「環境重視型地域」の実質的なスタートを開始した。この計画には、水環境の保全、自然緑地や農地の緑環境の保全、ゴミの資源化を図る物質循環の回復や、地球温暖化の原因である二酸化炭素等排出削減を視野に入れている。

計画の体系は、「全体目標」として「水循環と物質循環の保全を基盤とした、二セコ環

境文化の育成」を掲げ、その下に①【水循環を保全すること】によって、二セコの豊かな自然生態系と地域生活文化を守り育てる【②【物質循環型のゴミゼロ地域を目指す】を配している。

①の中で農業関連事項を見ると、「河川流域の農業用水の循環利用を高め、河川や地下水への汚染負荷を低減する」する手だてとして、(一)【クリーン農業を進める】大量の農薬や窒素肥料に依存する農業から有機農業への転換を進め、水系への環境負荷を軽減する、(二)【家畜を有効に活用管理する】家畜尿汚水など畜産廃棄物を河川や地下水へ流さない等、具体的に規定している。

また②の農業関連事項では、【生ゴミを土に戻す】生ゴミの資源化を推進するとしてい

る。現在、生ゴミ等を原料として堆肥を製造するプラント「二セコ堆肥センター」の建設稼働したことにより資源化を推進中である。

ここで参考に物質循環と廃棄物排出に関わる北海道の状況が、物質収支（どれだけの資源を採取し、消費し、廃棄しているか）の観点からどうなっているか瞥見すると、三点の特徴が挙げられる。

①資源・製品の輸・移入量と輸・移出量が約二対一とアンバランスで、特に、輸出入については、約二〇対一と一方的な輸入超過である。

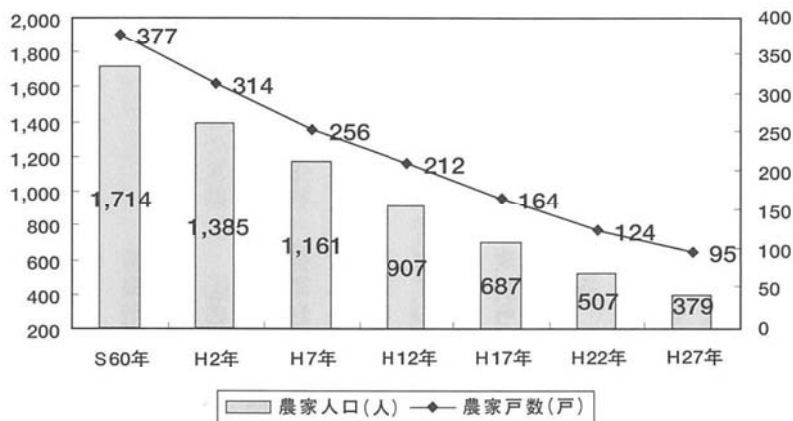
②廃棄物の発生量が多い割に、再生利用量が低い。

③循環型社会の形成からみると、道内の物質循環は多くの課題が残されている。

（北海道環境白書〇二年版による）

二セコ町の物質収支から見た物質循環の状況はデータ不備で明示できないが、北海道や全国の状況を踏まえ、環境計画で謳われている「大量の農薬や窒素肥料に依存する農業から有機農業へ」の方向を基本に、諸外国からの農薬や窒素化合物の大量輸入による地下水や大気への負荷が大変大きく、これが生態系における物質の健全な循環を損なっていることを深く認識し、「有機肥料」が自然界と人間社会の物質循環や、地域経済の物質循環をささえてきた物質の一つであることに着目し、農業が物質循環の基盤に立ち返るため循環できる適正バランスの有機肥料成分を活用し、循環できない化学成分を限りなく減らした「地域資源循環型クリーン農業」を町の農業の柱として実践中である。

表1 農家人口・戸数の推移と予測



出所：ニセコ町

併せて、作られた農作物がニセコ地域市場を循環する割合を増やす地産地消の仕組み作りが必要と考え現在模索中である。

◇ニセコ町農業の概況

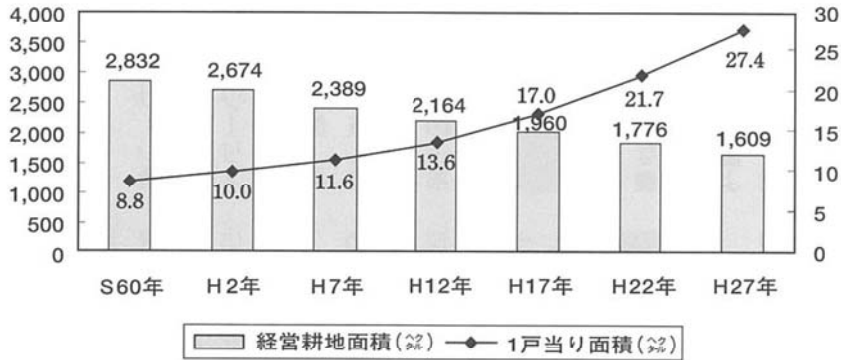
農家戸数と農家人口は年々減少してきており、平成二年に三一四戸、一、三八五人であったが平成十二年には二二戸、九〇七人とこの一〇年で四七八人、一〇二戸が減少している。また六五歳以上の農家高齢化率は二七・八％（平成十二年）と町全体の比率より高い。

耕地面積は、各作物とも年々減る傾向にあるが、二、八五〇畝（平成十二年）で、内訳は水田七〇二畝、普通畑が一、七五二畝、牧草地三九八畝。主な作付面積は、各作

物とも減少傾向にあり、総合的な地域としての生産力は低迷傾向である。その中で大豆は収穫の機械化定着で復活傾向にあることは特記される。水稲三六九畝、小麦八一畝、てんさい二七畝、馬鈴薯四五〇畝、豆類三〇一畝、野菜類二七八畝、牧草等五五五畝となっており、家畜農家は乳用牛一六戸で、一〇〇頭、養豚は一戸で六一〇頭を飼養している。

次に農業粗生産額では、耕種二億四千万円（八三・三％）、畜産四億五千万円（一六・七％）あわせて二六億九千万円（平成十一年産）である。品目別に見ると、水稲四億一千万円（一五・二％）、麦類三千万円（一・一％）、豆類一億八千万円（六・七％）、いも類七億九千万円（二九・四％）、野菜類六億九千万円（二五・七％）、てんさい他一億四千万円（五・二％）、畜産の乳用

表1 経営耕地面積・1戸当たり面積の推移と予測



出所：ニセコ町

牛三億七千万円（一三・八％）、豚八千万円（三％）となつてい
る。畑作（麦類・豆類・いも）
が四割、野菜類四分の一、畜産
と水稲を加えて比較的バラ
ンスのよい生産体系といえよう。

◇新農業振興計画

ニセコ町農業が直面する課
題は

①農家戸数の減少で集落機能
や農村活力の低下が予想さ
れ、地域機能の活性化が必要
であること。

②引き続き農地飽和状況のな
かで、担い手への流動化を積
極的に進めるための制度や
支援策の充実強化が急務で
あること。

③米などの生産調整対策や市
場価格の低迷により農家経
済は厳しい状況にあるが、
高収益野菜類の導入や産

直・加工など経営の複合化
を促進する必要があること。

④自己完結型の家族経営の実
態から、機械施設の保有が
過剰な環境にあり、コント
ラクターや共同化など利用
の組織化が必要であること。

⑤環境との調和に配慮し、消
費者の信頼に応えた「安心」
「安全」な産地確立のため、
地域資源循環型クリーン農
業の着実な実践が求められ
ていること。

⑥多様化する消費者ニーズに
応え「売れる農産物」をつ
くり、同時にニセコの観光
立地を活かした多様な販売
の実践が求められている。

これら課題に対し、このたび
町が策定した振興計画（平成十
五年～十九年）において「目指
す姿（ビジョン）」として

①地域ぐるみの担い手育成
②収益性の高いニセコ農業の

確立

③多様でゆとりある農業経営の確立

④豊かさや活力ある地域農村の構築

⑤環境と調和したクリーン農業の実践

⑥二セコ型グリーンツーリズムの確立

の六点を掲げ「主な対策・振興策」を掲げ取り組みをしている。

ここで取り組み事例の一部を紹介する。

一、「二セコ」農業塾

地域ぐるみの
担い手育成

地域農業を担う中核的な農業者の確保は緊急的な課題である。このため平成十四年度より「二セコ」21世紀農業塾」を開講している。目的は、農産物の販売戦略や生産の低コスト化、的確な投資判断が求められて

いる今日、企業的な経営管理能力向上を目指し一期二カ年の講座を受講するものである。カリキュラムは二カ年間で、一年目に農業簿記の履修、二年目には経営の診断と設計を「自分の経営実態に基づき資料」により行い、自己の経営の改善策と課題を整理する。

修了にあたり「認定農業者」の認定申請を受講者自身が行う。対象人員は一期二〇人、現在一期生二〇人、二期生二〇人が受講中である。期間は十四年度から十六年度の三期。

二、道の駅

「二セコ」ビュープラザ

多様でゆとりある
農業経営の確立

平成九年五月の開設以来利用者が年々増加し、年間一〇〇万人以上の利用者が訪れている。要望のあったフリースペース棟は昨年の改修工事に

より更に機能が充実し、道の駅利用者はもとより町内外から多くの人に好評を得ている。更に、駐車場拡充工事により、訪れる車両の収納力と二セコの玄関口としての機能が一層充実し、利用者がさらに増えることが期待されている。

なお、公募で店を出した六戸の農家のアイテム数は二二〇点、平成十四年度の販売実績は、合計で一億六百万円であった。

三、「二セコ」アクティブ・バス

二セコ型グリーン
ツーリズムの確立

昨年、友好提携関係を結んだ札幌市内大手ホテルとの企画として、本年六月一日から始まり終了の予定は十月一三日である。参加者はホテル宿泊客とホテル近隣の札幌市民も含み、ホテルを朝七時三〇分に出

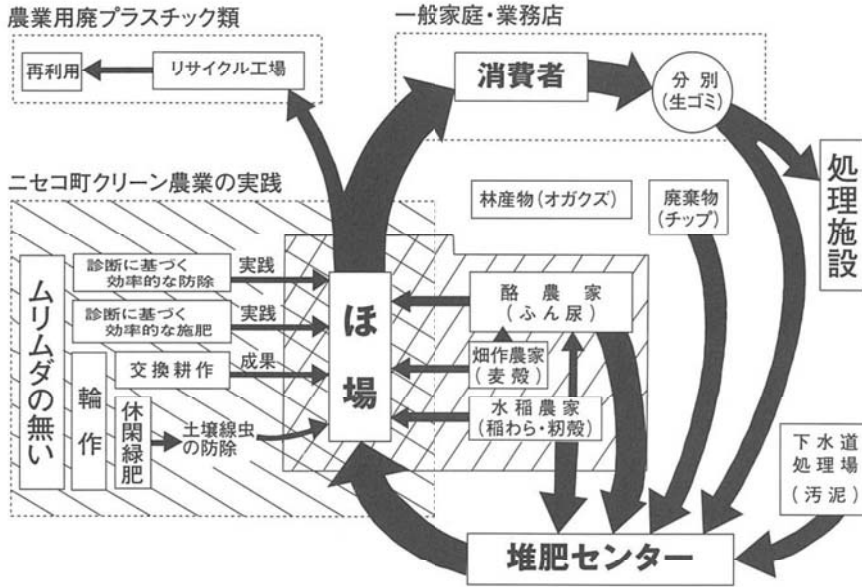
発し、昼食後アウトドア体験として二セコの農村景観の中でラフティングや乗馬等を体験し夕刻札幌市内に帰るコースである。今後は、農業体験のメニューも取り入れ、グリーンツーリズムの確立と内容充実を目指す意向である。

◇堆肥センター

環境と調和したクリーン農業の実践

目指す姿（ビジョン）「環境と調和したクリーン農業の実践」を確かなものとすべく平成十四年十一月に「二セコ町堆肥センター」が竣工し十二月からの試験操業を経て本格的に稼働を始めている。場所は町から車で約一〇分の同町字豊里地区。敷地約三万三千㎡。施設の構成は、前処理槽、一次発酵棟・二次発酵棟・水分調整庫／農機具庫・管理棟

図1 ニセコ町クリーン農業 地域循環図



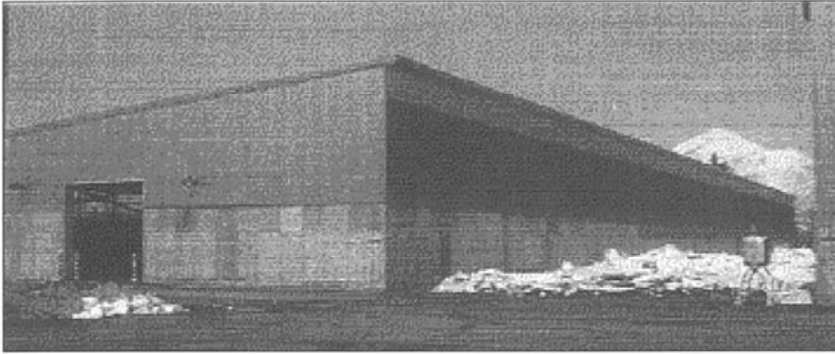
から成る。

処理工程を簡単に見ると、原料は畜ふん・生ごみ・下水汚泥であるが、当分の間分別処理していく予定である。生ごみ・下水汚泥は前処理工程で七日間、一次発酵工程九五日間、計一〇二日間で製品となる。畜ふんは、前処理工程で約七日間、一次発酵工程三三日間、二次発酵工程六五日間、計一〇五日間で製品となる。年間三〇〇日稼働であるので厳冬期間は前処理工程を延長し、確実な発酵を確保する予定である。

十五年度の堆肥製造計画を見ると、年間の原料堆肥八、二八一ト(うち畜ふん七、三三ト)、生ごみ・下水汚泥九五〇トを畜産農家他から集め、五、七三二トの製品堆肥を生産し、出来る製品水分は、六〇%前後としている。

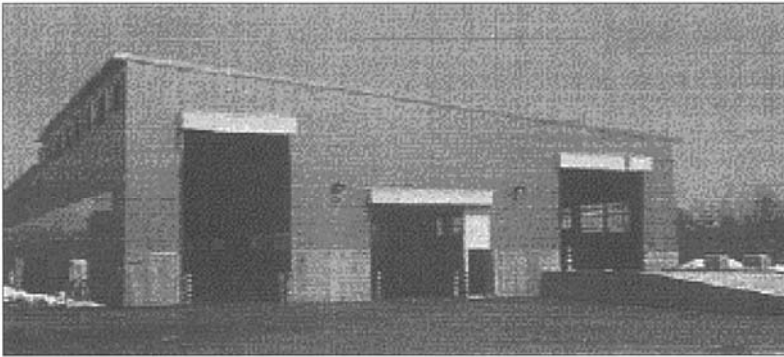
この施設の原料は、畜ふん・生ごみ・下水汚泥であるが、特徴として一般家庭等からの分別生ごみを利用した堆肥製品を作りこれをほ場へ還元し、出来る農産物が消費者の食卓へ回る「資源循環」の実現であり、環境の保全での「生ごみの資源化」を推進し「土に戻す」実践でもある。この仕組みの前提には、台所から出る残飯や調理くずの分別がポイントで、貝殻・牛骨・豚骨などは過二回収集の一般ごみに入れ除外をしていることである。十分に水切りし青色の生ごみ専用袋(有料)に入れて、生ごみ回収日に設置されているポリバケツに各自投入。生ごみ専用車が回収し前処理槽に搬入され処理工程に乗る。現在、異物除去後にかなりのビニールなど分解しないゴミとして排出されている。一層の消費者に分別徹底

表2 施設風景



↑ 一次発酵棟

↓ 二次発酵棟



を願うため、定期的に堆肥センターを一般公開し理解を図りつつある。

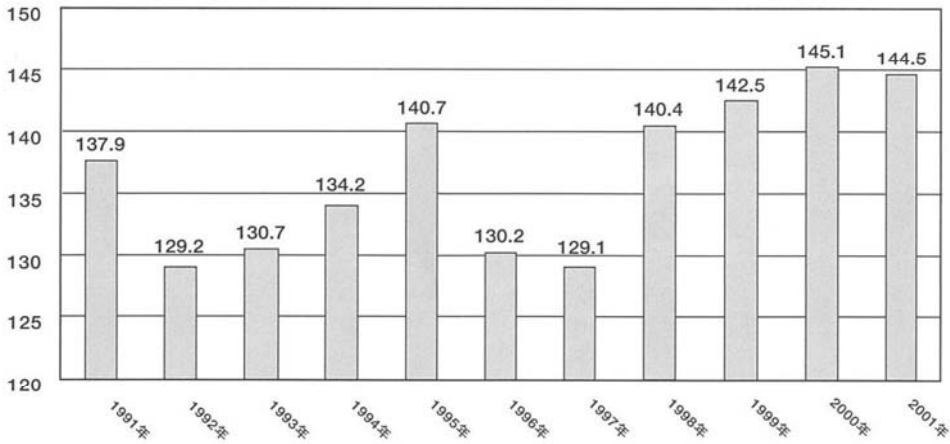
センターの製造する堆肥の利用により、収量安定、馬鈴薯や小麦・豆類の品質向上が期待されるとともに、畜産農家においては、環境基本計画の「家畜尿汚水など畜産廃棄物を河川や地下水へ流さない」環境汚染のない力強い営農展開が可能となり、地域全体の「環境と調和したクリーン農業の実践」に寄与すると期待が寄せられている。

◇ 地域の活性化

二セコ町の第三次産業は、観光を中心として、従事する人数が六割を超え、地域振興や雇用の拡大など地域経済を担う重要な役割を果たしている。農業もこの観光商業と連携し、町の活

表3 観光客の入り込み数

単位：万人



出所：ニセコ町

性化の役割を担っている。その具体例を次に紹介する。

①「実りの秋フェスティバル」ニセコ大収穫祭

ニセコ町の農産物販売を、札幌にあるホテルと提携し平成十四年十月の一ヶ月間行った。これはホテル内のレストランでニセコの食材を使い特別メニューを提供するものである。また期間中は、「ニセコ町農産物販売促進委員会」のメンバーがホテルで農産物宅配や産直即売会（六日間）を行ない、用意した「飲むヨーグルト」「いもち」など町の特産品を完売した。

最終日はホテル主催のチャリティーへも参加し収益金を社会福祉協議会に寄贈した。今後もホテルと提携し「多様な販売のあり方へチャレンジする農産物販売促進活動」と

して継続実施する予定である。

②「ニセコ花フェスタ2003 綺羅（きら）街道」

綺羅街道は、平成十四年に完成した道の駅「ニセコビュープラザ」ニセコ大橋間の路線名称である。町民の願いである地域の活性化と潤いのある街づくりを基本として、昭和六十三年のニセコ大橋建設開始から一四年の歳月を要して整備されたこの街道を舞台に、花フェスティバルがコミュニティの再生と地域活性化へ向けた取組みとして、昨年七月～九月に初めて実施された。この実現のため「花フェスタ実行委員会」が設けられその中に「農業活性化部会」も設置されており、部会の目標として「自らが生産、商品化、流通を手がける」ことにより、「産地直送型農業」



の可能性と問題点の確認を行い、今後の二セコ農業の有り方を「観光」と「商業」の協働作業の中から発見することを目指した。そのため

・特産品力タログの作成

・夜市、朝市、ふそろいの農産物市場の開催

・農産物の企画商品化

・ポテト料理日本一コンテストなど、に取り組んだ

今年も昨年に引き続き、七月一日から九月三日まで綺羅街道を舞台に開催される。二セコ花フェスタ2003綺羅街道」が、コミュニティの向上や、町の活性化に向け農業と観光・商業との緊密な連携のもと益々発展継続することが期待されている。

◇まとめ

今回レポートした二セコ町

は、農業と観光・商業の連携により、地域産業を創造しようとする中である。同時に環境を守り育てることを基本に環境基本計画を策定し実践中の町でもある。「地域資源の循環に取り組み、土地・人・未来を救いたい」という熱い気持ちがある一人ひとりに広がり、現在様々な仕組み作りから実践行動まで、地域の活性化につながっていることが随所に感じられた。

二セコ町のこれからは、地域農業に立脚した農産物生産と販売および一般消費者を含めた観光産業との連携でより飛躍を遂げるであろうとの感を強くした。

レポーター

地域農研 専任研究員

川原和雄